決定木分析を用いた身体接触の日韓対照研究
—「空間の公私性」という仮説—

新井保裕
東京大学

1．はじめに

近年，日本と韓国は人と文化の交流が活発化し，日本人と韓国人が直接，対面コミュニケーションをとる機会も増加している。日韓は同じ東アジア漢字文化圏に属し，文化，言語も類似した部分が多いため，両国人の対面コミュニケーションは比較的スムーズに行えるように思われる。しかし実際は，類似部分が多いゆえに，相手国に対して自国の「常識」を期待してしまい，そこに存在するコミュニケーション行動の小さな違いが，却って誤解を生みやすい。

こうした背景により，日韓のコミュニケーション行動を対照した学術的研究が増えている。代表的な先行研究として，身体接触を扱ったものが挙げられ，韓国人は日本人よりも身体接触を好むという結果が，多くの研究で指摘されている。しかし先行研究で扱われる身体接触意識は，日韓の全体的傾向差に注目したものが多く，国差以外の行動主体，行動客体の属性や場面という要因に注目したものは決して多くない。さらにどの先行研究も，数値の単純な比較に留まっており，統計手法を用いたデータの総合的な分析は行われていないのが現状である。

そこで本稿では，決定木分析という統計手法を用いて，身体接触の総合的研究を行う。[1]先行研究と異なり，要因間の大小関係を明らかにする過程で，行動主体，行動客体の属性だけでなく，「空間の公私性」という場面要因が身体接触に影響を及ぼし得るという仮説を提唱する。そして日韓の対人行動意識について少考する。また平行して，決定木分析をコミュニケーション行動研究に用いることの有効性についても考える。

2．先行研究

本節では，身体接触を日韓対照した先行研究を概観するが，代表的なものとして任・井出(2004)，洪珉杓(2007)，尾崎編(2008)が挙げられる。

任・井出(2004)では社会言語学と言語人類学の観点から，言語行動を中心とした言語と文化の日韓比較を行なっている。本稿で扱う身体接触については，スキンシップに注目し，主に筆者の経験や感想から，韓国では握手，ハグを用いて連帯感を強化する傾向が日本より強いと述べられている。ただし筆者の経験談に基づいた分析であるために，具体的な調査データは示されて

いない。

一方，洪珉杓(2007)では言語行動だけではなく，言語生活，呼称文化，非言語行動文化を含めたコミュニケーション全般に渡って幅広く扱っている。筆者の経験や感想ではなく，フィールドワークによる調査結果を基に日韓の言語と文化を実証的に比較している。身体接触に関しては，偶然再会した際に行うあいさつ時の接触行動や歩行時のそれを扱い，大学生を対象とした意識調査を行った。その結果，韓国人が日本人よりも握手や両手のとりあい，腕組みなどの身体接触を頻繁に行うことを明らかにしている。[2]先の任・井出(2004)と異なり，日韓の身体接触を実証的に分析しているが，身体接触の客体が友人に限定されているため，身体接触意識の全体像を解明できているとは言い難い。

最後に尾崎編(2008)を概観する。尾崎編(2008)では様々な年代の日本人，韓国人それぞれ1000人を越える人々，合計2175名を対象としたアンケート調査と，大学生62人を対象とした面接調査を実施し，日韓の対人行動の違いを明らかにした。[3]調査項目は，相手の所有物を使う際の言葉の有無や座席選択，空間と用具の共有，依頼行動と感謝行動，会話における話題選択など多岐に渡る。本稿で扱う身体接触については，「混み合う電車の中で，座席が少し空いている時，そこに座るか否か」という観点から調査を行なっている。尾崎編(2008)に所収される任栄哲(2008)では分析の結果，全ての年齢層で，どの行動客体に対しても，韓国人の方が日本人よりも座る人の割合が高い，つまり身体接触への拒否感が小さいことを示した。また先の二研究と異なり，行動主体・行動客体の属性にも注目している。[4]

しかし任栄哲(2008)は，洪珉杓(2007)と同様に，調査データの数値上の単純な比較に留まり，要因間の大小関係に十分な分析が成されていない。また「混み合う電車の中で座席に座るか否か」という非常に限られた場面のみを対象にしているため，場面という要因について考えられておらず，日韓の身体接触意識をどこまで明らかにできているかは定かではない。前述の通り，尾崎編(2008)では調査項目が多岐に渡るが，尾崎編(2008)に所収される論考は全て，それぞれ一つの調査項目のみを分析対象としており，異なる調査項目の比較分析は行われていない。しかし調査項目の中には項目間に関連性が見られると考えられるものもあり，身体接触についても，尾崎編(2008)の座席選択という調査項目がそれに当たる。

そこで本稿では，要因間の階層性を視覚的に検討できる統計手法の決定木分析を用いて，尾崎編(2008)の調査データを再分析し，異なる項目間の比較分析を行う。[5]そして身体接触における要因間の大小関係や場面要因の日韓差に注目していく。

3．調査概要

本稿は尾崎編(2008)の調査データを二次分析するが，それにあたり，調査の概要を見ていく。

3．1．調査の全体的概要

尾崎編(2008)では，無作為に選ばれた日韓の多数の市民（東京都・大阪府・ソウル・プサン在住者2175名）に対するアンケート調査を2002年から2003年にかけて実施した。日本では，抽出した回答予定者に対して，郵便で調査票を送付し，自記式による回答を依頼し，2割前後を回収した。一方，韓国では民間の調査会社に委託したが，日本での回答方法に合わせて自記式による回答を依頼した。地域・年齢層・性別ごとの有効回収数は以下の通りである。

表1　地域・年齢層・性別ごとの有効回収数（括弧内は男性回答者数）

	東京	大阪	ソウル	プサン
高年層	104 (56)	—	100 (49)	—
中年層	104 (42)	—	101 (50)	—
若上層	175 (69)	184 (73)	300 (150)	200 (102)
若下層	248 (106)	147 (63)	306 (156)	206 (106)

なお年齢層は下記のように設定されている。[6]

高年層（60代）　　：1934~43年生まれ
中年層（40代）　　：1954~63年生まれ
若上層（20代後半）：1974~78年生まれ
若下層（20代前半）：1979~83年生まれ

本稿の目的の一つに身体接触における要因間の大小関係を明らかにすることが挙げられる。そのため，行動主体の属性にもできる限り注目しなければならない。そこで本稿では，若上層，若下層だけでなく，高年層，中年層も調査対象とした東京，ソウルの調査結果を再分析の対象とする。[7]

3．2．身体接触調査

ここからは実際の調査項目を見る。尾崎編(2008)では身体接触に関して，以下のような調査を行なっている。[8]

「あなたが電車に乗ったところ，次の(1)～(10)の人が座席に座っているとします。その横が少しあいていますが，あなたも座るとややきゅうくつそうです。そんなとき，あなただったら座席に座りそうでしょう

か？」[9]

(1) **友達（同性）** (2) **友達（異性）**
(3) 以前からよく知っている，**年上の同性**
(4) 以前からよく知っている，**年上の異性**
(5) 最近知り合いになったばかりの，**年齢が近い同性**
(6) 最近知り合いになったばかりの，**年齢が近い異性**
(7) 最近知り合いになったばかりの，**年上の同性**
(8) 最近知り合いになったばかりの，**年上の異性**
(9) あなたの**家族**
(10) **見知らぬ人**

このように多くの行動客体を想定することによって，身体接触意識を日韓対照研究した。

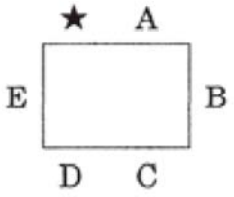
3．3．座席選択調査

しかし前述のように，尾崎編(2008)では様々な調査項目を扱っており，身体接触意識が反映されそうな調査項目は上記の身体接触調査だけに限らない。本稿では身体接触意識との関連が考えられる調査項目として，座席選択調査を取り上げる。座席選択調査は，具体的に下記のような設問で行われている。[10]

「次のようなテーブルと 6 つの椅子のある部屋で、あなたともう一人の人とで相談をすることになっていたとします。相手が先に来ていて，下の図の★の椅子に座っていました。そんなとき，あなたは普段，残りの A~E のうちどこに座りそうでしょうか？

まず一番座りそうな椅子を 1 つだけ選び，◎を付けてください。

次に、その他の席について、座りそうな椅子に○，絶対に座らないと思う椅子には×をつけてください。（○と×はいくつでも）」



★に座っている相手としては次の(1)~(9)が想定されている。[11]

(1) **友達（同性）** (2) **友達（異性）**

(3) 以前からよく知っている，**年上の同性**
(4) 以前からよく知っている，**年上の異性**
(5) 最近知り合いになったばかりの，**年齢が近い同性**
(6) 最近知り合いになったばかりの，**年齢が近い異性**
(7) 最近知り合いになったばかりの，**年上の同性**
(8) 最近知り合いになったばかりの，**年上の異性**
(9) あなたの**家族**

この座席選択調査ではA~Eの5つの席が想定されているが，そのうちのA席は相手の真隣である点に，ここでは注目したい。A席に座るということは相手との身体接触を伴い得るものであり，先の身体接触調査と共通点があると考えることができる。ここに身体接触調査と座席選択調査を比較することの意義が生じ得る。

しかし，2章でも述べたように，尾崎編(2008)は調査項目こそ多岐に渡っているものの，調査項目間の比較研究は行われないでいる。そこで本稿では，身体接触調査と座席選択調査で想定された異なる二場面の比較を行い，身体接触意識の総合的研究を行う。

4．決定木分析

本稿では身体接触調査と座席選択調査の結果を比較するが，異なる二調査の比較を行うには，共通の分析方法を用いなければならない。本稿は身体接触における要因間の大小関係や場面要因に注目するため，ここでは要因間の階層性を視覚的に検討できる決定木分析を用いる。決定木分析は以下のような統計手法である。

決定木分析(Decision Tree Analysis)：

複数の独立変数によって，1つの従属変数を予測する多変量解析の1つ。その結果が木の枝葉のように描かれるので樹形モデルとも言われる。特定のアルゴリズムに従って，従属変数に影響を与えると考えられる複数の独立変数の中から，予測に有意に働くものが選択される。検定の繰り返しを通して，独立変数が持つ条件の間で有意差がある場合にのみ，子ノード(child node)が生まれ，樹木が成長する。決定木分析では，分類結果に有意な影響を持つ複数の独立変数のうち強いものから順に現れる。また，予測に有意でない独立変数は木には現れない。得られた木を参照しながら，複数の要因の階層性を視覚的に検討できるのが利点である。(近藤・小森編2012を筆者が要約)

なお，言語学関連分野における決定木分析を用いた先行研究として，玉

岡(2006)や林炫情他(2011)が挙げられる。玉岡(2006)は接続助詞「から」,「ので」,「のに」が文中表現・文末表現のどちらで現れるか，用いられ方に違いはあるのかを共起する副詞との関連も含めて，決定木分析を用いて議論している。

また林炫情他(2011)では，ある行為 x の持つフェイス・リスクの大きさ $W_{(x)}$は相手との距離(D)，力関係(P)，事柄の負荷度(R)の 3 つの要因が加算的に働いて決まってくるという Brown&Levinson のポライトネス理論に，日韓の文化差，聞き手が話し手と同性か異性かという性差の影響がどのように絡み合っているかを，決定木分析を用いて多元的かつ階層的に把握した。

両研究共に決定木分析の有効性を示しているが，決定木分析を用いたコミュニケーション行動研究は決して多くない。そこで本稿では決定木分析を用いて尾崎編(2008)を二次分析し，身体接触の日韓対照研究を行う一方で，決定木分析をコミュニケーション行動研究に用いることの有効性についても考える。[12)]

5．分析の枠組

前節で決定木分析という統計手法について概観した。本稿ではこの決定木分析を用いて身体接触の日韓対照研究を行うが，身体接触調査と座席選択調査という異なる二場面の調査結果を比較するにあたり，共通した分析の枠組を備えなければならない。本節ではその分析の枠組について述べる。

身体接触調査は「座席に座るか否か」という二択の回答方式であったのに対して，座席選択調査は「A~E の座席のうち，一番座りそうな椅子はどれか（複数回答不可），あるいは座りそうな椅子，絶対座らなさそうな椅子はどれか（複数回答可）」という五択の回答方式（一部複数回答可）であった。本稿では両調査の分析の枠組を共通のものとするために，座席選択調査において，身体接触を伴い得る A 席のみを分析の対象とする。さらに A 席に「一番座りそう」あるいは「座りそう」と回答した調査対象者の合計に注目し，「A 席に座りそうか否か」という二択式に調整して，先の身体接触調査と統一する。

本稿では決定木分析を用いて，要因間の大小関係を明らかにすることを目的としている。行動主体の属性にできる限り注目するため，若上層，若下層だけでなく高年層，中年層も対象としている東京・ソウルの調査結果を再分析の対象とすることは先に述べた。さらに行動客体の属性にも注目し，身体接触調査，座席選択調査の両調査の比較を行うために，両調査に共通した仮想相手で，属性が明確な(1)~(8)を分析し，(9)家族や(10)見知らぬ人（身体接触調査のみ）は分析の対象外とする。本稿で分析の対象となる行動客体の属性は以下の通りである。

性別（男性，女性）×年齢（年上，年近）×親疎（前知，近知）

(1) **友達（同性）**（年近，前知）　(2) **友達（異性）**（年近，前知）
(3) 以前からよく知っている，**年上の同性**（年上，前知）
(4) 以前からよく知っている，**年上の異性**（年上，前知）
(5) 最近知り合いになったばかりの，**年齢が近い同性**（年近，近知）
(6) 最近知り合いになったばかりの，**年齢が近い異性**（年近，近知）
(7) 最近知り合いになったばかりの，**年上の同性**（年上，近知）
(8) 最近知り合いになったばかりの，**年上の異性**（年上，近知）

行動客体については，性別，年齢，親疎の三属性に注目し，計８通りの組み合わせを分析対象とする。これにより，行動主体の属性である性別，年齢層を合わせた，計５つの要因間の大小関係を，決定木分析を用いて明らかにする。本稿の分析対象となる行動主体・行動客体の属性をまとめたものが下記表である。

表２　本稿の分析対象となる行動主体・行動客体の属性

属性	行動主体		行動客体		
	性別	年齢	性別	年齢	親疎
	男性 女性	高年層 中年層 若上層 若下層	男性 女性	年上 年近	前知 近知

６．分析結果・考察

本稿で日韓における身体接触の総合的研究を行うため，４節では分析手法として，要因間の階層関係を視覚的に検討できる決定木分析を提示した。そして５節では決定木分析を使う枠組として，本稿の分析対象とする要因である属性について主に述べた。これらを踏まえ，本節では実際に分析・考察を行なっていく。日韓の身体接触調査，座席選択調査を決定木分析で検討した結果は以下の図の通りである。[13)]

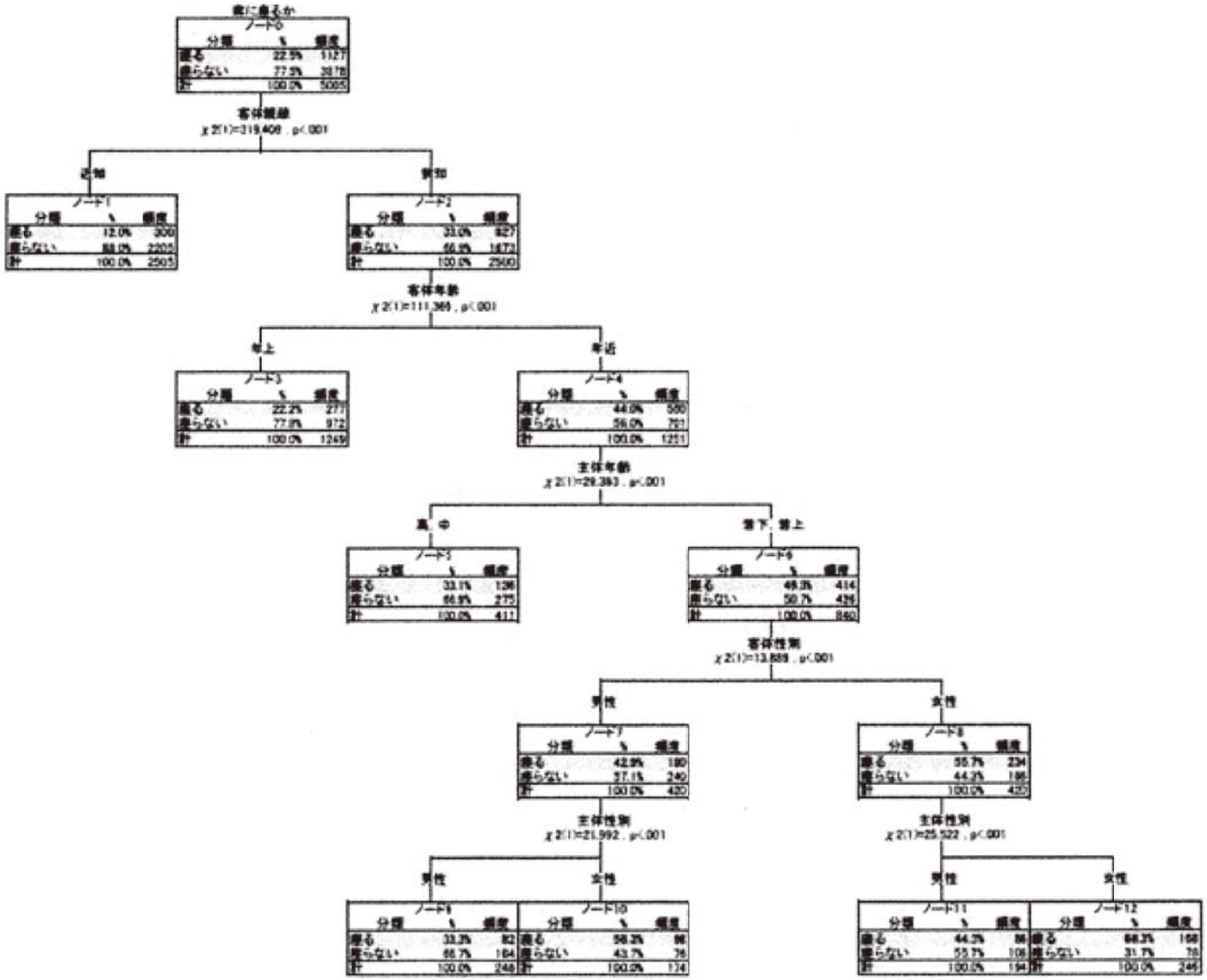


図１　身体接触調査分析結果（日本）

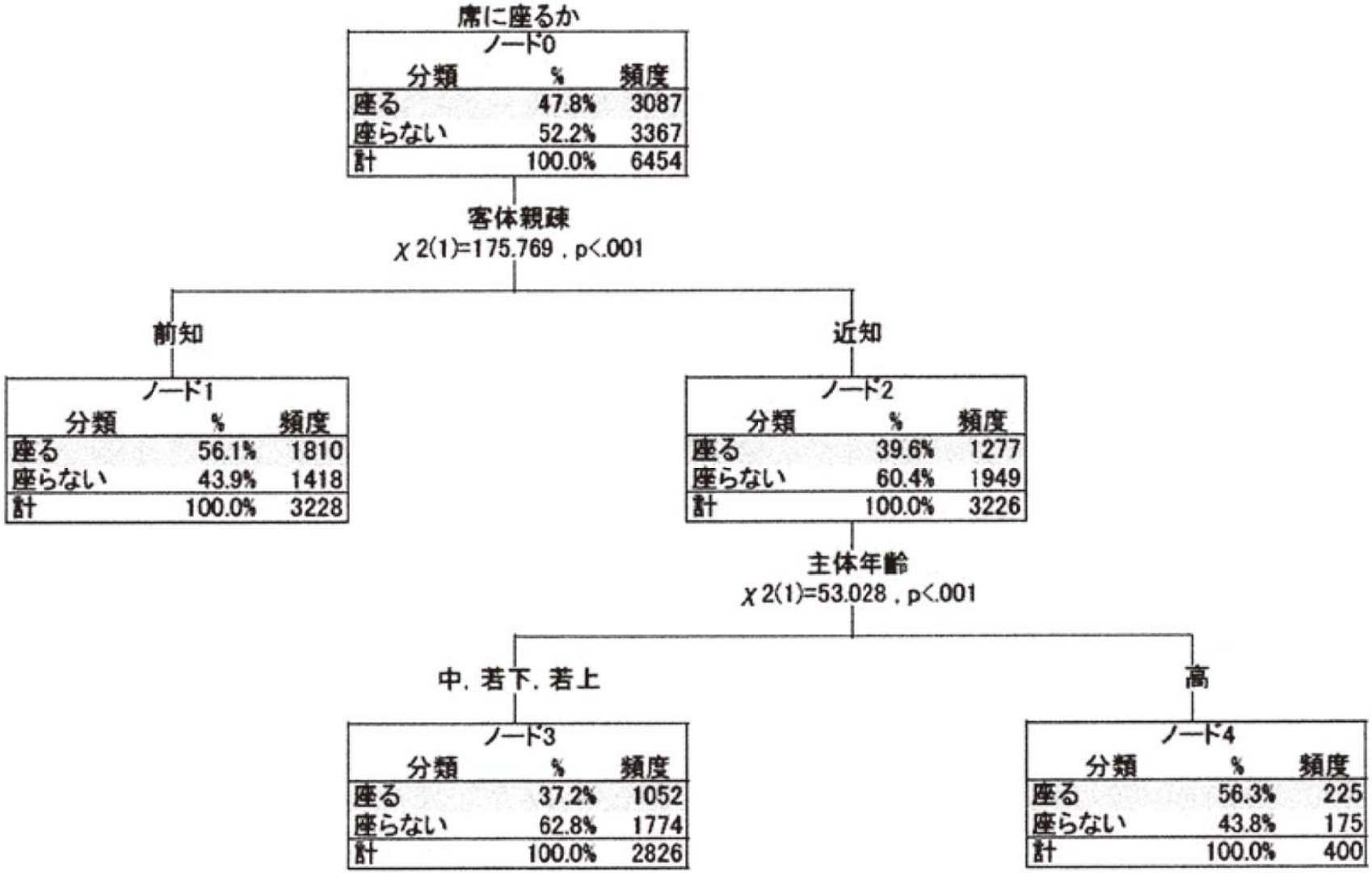


図 2　身体接触調査分析結果（韓国）

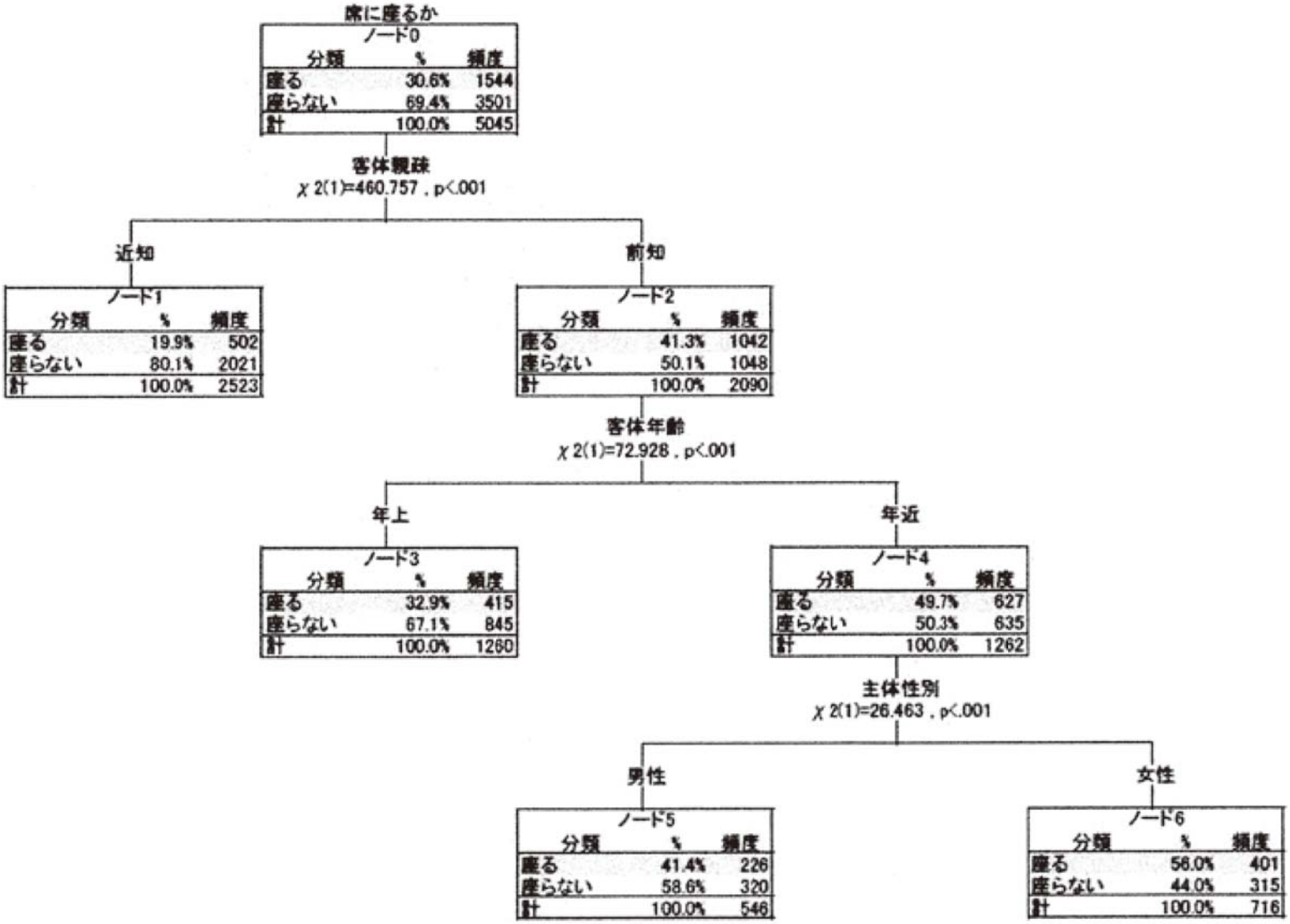


図３　座席選択調査分析結果（日本）

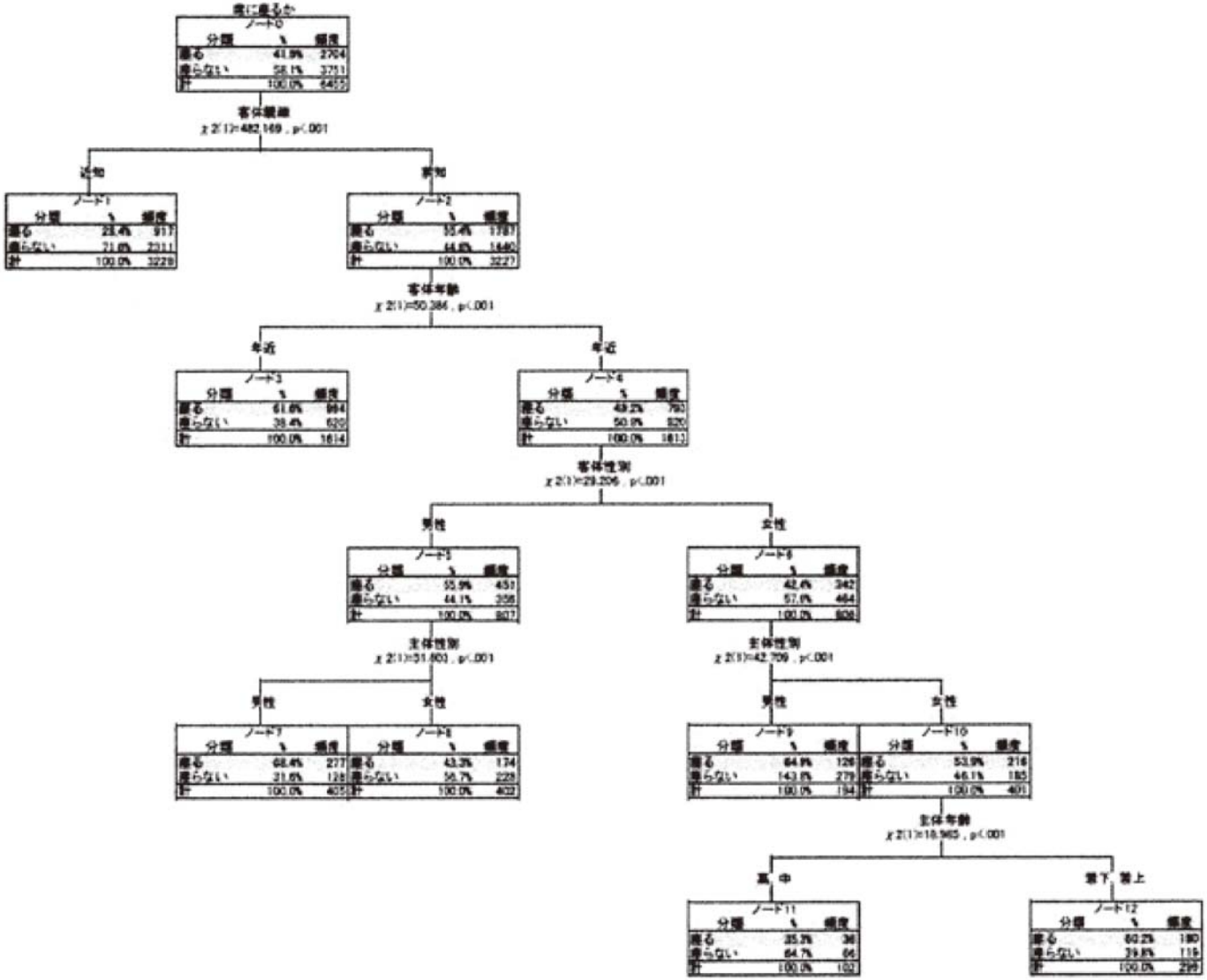


図 4　座席選択調査分析結果（韓国）

図 1~4 が日韓における身体接触調査，座席選択調査の決定木分析による分析結果である。全体的結果としては，身体接触調査，座席選択調査共に，日本よりも韓国の方が「座る」を回答した調査対象者の割合が高く，日本人より韓国人の方が身体接触を好む傾向が見られる。これは既存の研究で指摘された通りである[14]。

続いて決定木分析により明らかになった各要因の大小関係について見ていく。要因間の大小関係をまとめると以下のようになる。

要因間の大小関係[15]：

身体（日本）　親疎＞客体年齢＞主体年齢＞客体性別＞主体性別
身体（韓国）　親疎　　＞主体年齢
座席（日本）　親疎＞客体年齢　　＞主体性別
座席（韓国）　親疎＞客体年齢　　＞客体性別＞主体性別＞主体年齢

上記結果からもわかるように，日韓のどの調査においても，行動客体の親疎が「座りそうか否か」を決定づける最大の要因である。しかし図 1~4 を比較するとわかるように，他の調査が前知より下でさらに分岐していくのに対して，韓国の身体接触調査のみ，近知より下で分岐するのが特徴的である。韓国の身体接触調査の場合，隣が以前からよく知っている相手であれば，座る割合が高く，他の要因の影響は受けないことがわかる。

行動客体の親疎以下の要因間の大小関係は，調査によっては有意差が認められないものもあるが，概して客体年齢＞主体年齢＞客体性別＞主体性別の順に並ぶ。[16]行動客体の親疎を除けば，要因の大小関係は客体属性＞主体属性，年齢＞性別にまとめられると言えよう。本稿と同一の身体接触調査データを分析した任栄哲(2008)では，行動客体の年齢よりも行動客体の性別を基準とする傾向が見られると述べられているが，決定木分析を用いた本稿では正反対の傾向が見られた。[17]これは任栄哲(2008)が単純な数値の比較に留まっているためだと思われ，決定木分析という統計手法を用いることにより，身体接触の要因間大小関係が明確になったと言える。[18]

ただし韓国の座席選択調査のみ，主体年齢が最小の要因として現れた。要因間の大小関係が客体年齢＞客体性別＞主体性別＞主体年齢となっており，他の調査と異なり，行動主体に注目するか行動客体に注目するかによって，年齢と性別という要因間の大小関係が逆転するという対称関係を成している。これは韓国の座席選択において，行動主体の年齢差，つまり世代差が比較的小さいことを表している。

ここまでは主に，各要因の大小関係について見てきた。続いては各要因の大小関係だけではなく，子ノード数も含めた樹木の全体構造に注目する。各調査データを決定木分析した結果得られた樹木構造の要因数，子ノード数をまとめ

たものが次表である。

表3　各調査データにおける要因数，子ノード数

	身体接触調査		座席選択調査	
	要因数	子ノード数	要因数	子ノード数
日本	5	12	3	6
韓国	2	4	5	12

表からも明らかであるが，日本の場合，要因数が身体接触調査(5)＞座席選択調査(3)であるのに対して，韓国の場合は座席選択調査(5)＞身体接触調査(2)となっており，その順序が逆転している。またその傾向は要因数だけでなく，子ノード数にも見られ，日本では身体接触調査(12)＞座席選択調査(6)である一方，韓国の場合は座席選択調査(12)＞身体接触調査(4)となっている。また全体的な座る割合を見ても，日本では座席選択調査(30.6%)＞身体接触調査(22.5%)である反面，韓国では身体接触調査(47.8%)＞座席選択調査(41.9%)と正反対の傾向を見せている。

ここまで同一国内での身体接触調査と座席選択調査の比較を行なってきたが，同一調査に焦点を当て，日韓で比較した場合でも，座る割合を除く，要因数，子ノード数には同様の逆転現象が見られる。

このように日韓における身体接触調査と座席選択調査の結果はそれぞれ大きく異なるが，対照的に日本の身体接触調査と韓国の座席選択調査は，要因数 5，子ノード数 12 で共通している。また各要因下における分岐のし方も共通している。また先の二調査ほどではないが，日本の座席選択調査と韓国の身体接触調査も，要因数，子ノード数が比較的近い値を示しており，類似した傾向が見られる。つまり同国内における両調査の結果間や，同調査内における両国の結果間よりも，日本における身体接触調査結果と韓国における座席選択調査の結果間，及び日本における座席選択調査結果と韓国における身体接触調査の結果間の方が類似した様相を見せており，たいへん興味深い現象が見られる。

それではなぜこうした現象が見られるのか。本節の後半ではその理由を探っていく。ここで改めて，身体接触調査と座席選択調査で扱われた場面について考える。身体接触調査は「混み合った電車の中で相手の隣の座席に座るか否か」という電車内での行為選択に注目している一方で，本稿における座席選択調査は「テーブルと 6 つの椅子がある部屋で相手の隣の座席に座るか否か」という，個室内での行為選択に焦点を当てている。つまり「相手の隣の席に座るか否か」を調査・分析している点で両者は共通しているが，その対象となる場面は電車あるいは個室と異なっている。さらに電車というのは自分や知り合い，自分と何らかの関係がある人だけではなく，他人と空間を共有しており，非常に公共性の高い空間であると言えるのに対して，個室は自分と知り合い，自分と何ら

かの関係がある人だけで共有する，私的性の高い空間である。本稿では，こうした公共性，私的性に注目し，両場面の違いを「空間の公私性」の違いと捉える。そしてこの「空間の公私性」が身体接触意識に影響を与えるという仮説を提案する。

「空間の公私性」という仮説のもとに，日韓の身体接触を考えると以下のようになる。日本の場合，個室という私的性の高い空間では，電車という公共性の高い空間に比べて，相対的に座る割合が高く，要因も少なくなる。つまり，空間の私的性が高くなると，行動主体や行動客体の属性の影響を比較的受けずに，座るという行為が選択されやすくなると言える。一方，韓国の場合は対照的に，電車という公共性の高い空間で，相対的に座る割合が高く，要因も少なくなる。韓国の身体接触調査では親疎という要因において，他の調査と異なり，前知ではなく近知で分岐することは先に述べた。つまり，前知の場合は他の要因の影響を受けずに座る割合が高くなるということだが，これもこうした公共性の高い空間に現れる身体接触意識の一環であると言える。上のように「空間の公私性」は日韓それぞれの身体接触に与える影響が異なると考えられ，これにより，日本における身体接触調査結果と韓国における座席選択調査の結果間，及び日本における座席選択調査結果と韓国における身体接触調査の結果間で類似した様相が見られると推測される。

7．日韓の対人行動意識少考

前節では日韓の身体接触意識に影響を与える要因として，「空間の公私性」という仮説を提唱した。本節ではこの「空間の公私性」が，身体接触意識だけでなく，日韓の対人行動意識にどのように位置づけられるかを少考する。

三宅(1994)は以下のような「ウチ・ソト・ヨソ」モデルを用いて，日本人の言語行動を説明した。

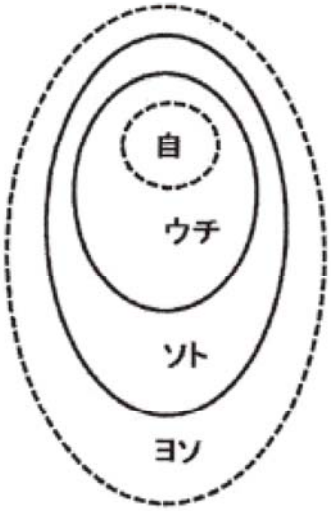


図5　日本人の「ウチ・ソト・ヨソ」モデル（三宅 1994）

三宅(1994)の「ウチ・ソト・ヨソ」モデルは自己を中心とした人間関係を表している。ウチに属する人間は，自己の周りの家族やごく親しい人々であり，ソトに属する人間は，ごく親しいわけではないが自己やウチと関連のある人々を指す。ヨソに属する人間は，自己やウチとは普段関係がないが，たまたま何かのきっかけで関与した人々とする。ウチとソトの間にははっきりとした境界があるが，ウチの相手には常体，ソトの相手には敬体を使って話すといった言語行動の差にもしっかりと反映されている（任・井出 2004）。[19]一方，ソトとヨソにもはっきりとした区別がある。三宅(1994)は，取引先の人間には丁寧で気配りを尽くす会社員が，仕事を終わって電車に乗ると，立っている人がいるのに座席を二人分取って座る例を挙げて，この区別を説明している。[20]

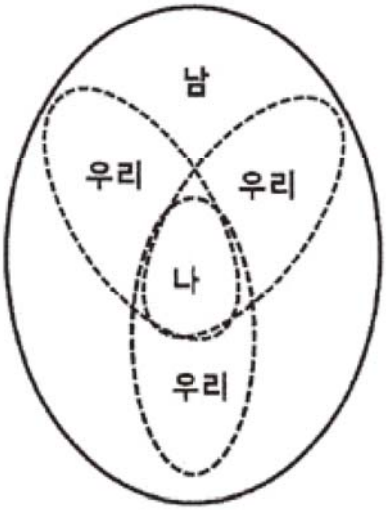


図 6　韓国人の「우리・남」モデル（任・井出 2004）

任・井出(2004)は韓国人の言語行動を図 6 のような「우리・남」という枠組から見た。韓国の場合，自分（나）を取り巻く우리の世界は，いくつもの共同体から成り立っているという。韓国人にとっての우리は自分（나）の拡大組織であるのだが，日本人の自己とウチの関係を比較すると，우리世界は自分が属する共同体の集合として成り立っている傾向が強いと述べられている。一方，우리に属さない人は남の世界に属する人として区別される。우리の結束は남に比べて圧倒的に強いと言われている。

それでは本稿で提示した「空間の公私性」という仮説は，こうした「ウチ・ソト・ヨソ」モデル，「우리・남」モデルにおいてどのように位置づけられるのだろうか。「空間の公私性」とは，自分と何らかの関係も持たない人との空間共有の程度を示すものであった。日本の場合，自分と何らかの関係も持たない人とはまさにヨソに所属する人であり，「空間の公私性」をヨソの視点の程度と言い換えることができる。公共性の高い空間である電車はヨソの視点が存在する

一方で，私的性の高い空間である個室にはヨソの視点が存在しない。前節で決定木分析を用いて，日本の身体接触を分析した結果，個室での座席選択は電車での身体接触より，影響を与える要因数が少なく，座る割合が高かった。つまり，ヨソの視点がある電車に比べて，ヨソの視点が存在しない個室では，相対的に無条件に「座る」という行為が選択されやすく，より「大胆」に身体接触が行われている。ヨソという視点が，ウチ・ソトへの対人行動を規定していると言える。

三宅(1994)ではヨソの相手には気を遣わない傾向があることを述べられているが，同時に「よそ様の前で恥ずかしい」といった表現がある。一見，そうした傾向とこの表現は矛盾するように見えるが，前者におけるヨソは対人行動の相手である一方で，後者におけるヨソは対人行動を見る視点であり，その役割は異なる。ヨソは視点として働く時，ウチ・ソトへの対人行動を規定する機能を持つと考えることができる。なお任・井出(2004)でも同様に「よそ様の前で恥ずかしい」という表現に着目して，ヨソが自分と社会的に何らかの接点が生じた場合は，自分の行動を監視する規範としての「世間」という目にも成り得ることを指摘している。[21]ここまでの議論をもとに，日本人の「ウチ・ソト・ヨソ」モデルを修正すると図7のようになる。

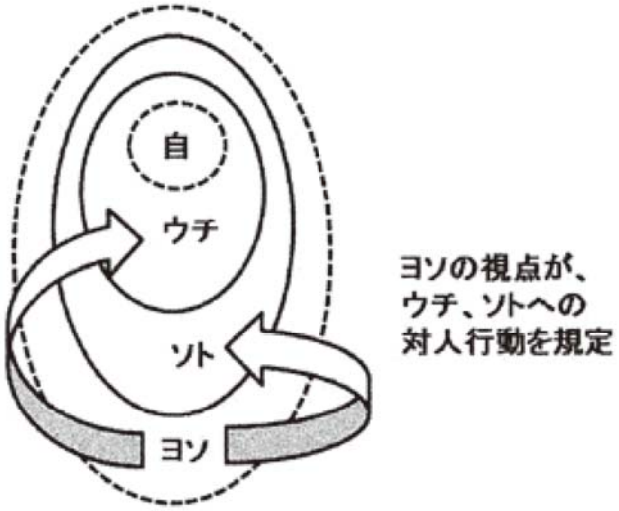


図7　日本人の「ウチ・ソト・ヨソ」モデル修正版

同様に，韓国の場合も「空間の公私性」は남の視点の程度と置換できる。公共性の高い空間である電車は남の視点が存在する一方で，私的性の高い空間である個室には남の視点が存在しない。日本とは対照的に，韓国は電車での身体接触が個室での座席選択より，影響を与える要因が少なく，座る割合が高いという結果が現れた。つまり，남の視点がない個室に比べると，남の視点がある電車の方が，より「大胆」な身体接触が行われている。日本でヨソという視点が，ウチ・ソトへの対人行動を規定しているのと同様に，韓国でも남という視

点が우리への対人行動を規定している。しかし韓国の場合は남という視点が存在することにより，身体接触が抑制されるのではなく促進されており，日本とは正反対の働きを見せている。

任・井出(2004)では우리世界は自分が所属する共同体の集合として成り立っている傾向が強いと述べられている。しかし，この言説をそのまま受け入れると，우리社会は時の経過と共に拡大を続け，理論上は全ての対人関係が우리に成り得る。当然ではあるが，現実的にはそうではなく，남の存在が消失することなく，우리と남は併存し続けている。果たしてその理由はなんであろうか。ここでは一つの可能性を提案する。これまで우리に属さない人が남に属すると考えられてきた。しかし実際はその反対であり，남の視点が，その状況に応じて最も相応しい우리を選択し，さらに우리への対人行動を規定する。そのように選択された우리は남との比較を通じて，남よりも圧倒的に強い結束力を示そうとするため，はっきりと우리と남は区別される。우리は決して固定的なものではなく，状況に応じた可変的なものであると言えるかもしれない。この考えをもとに韓国人の「우리・남」モデルを修正したものが下図である。

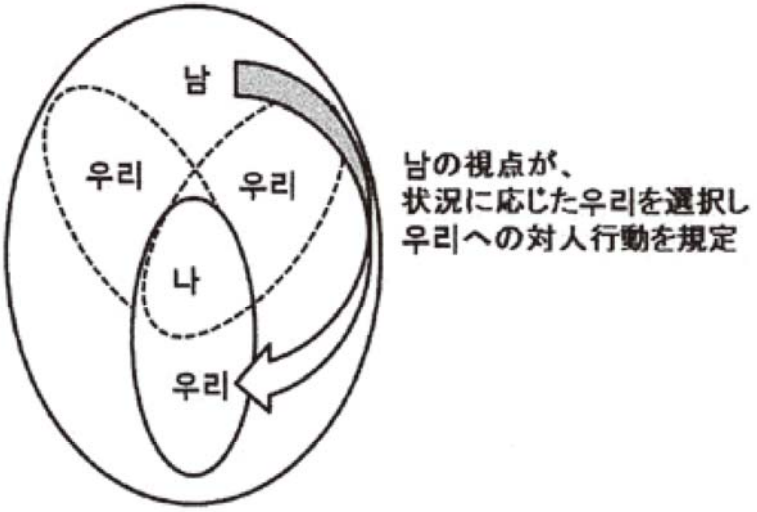


図８　韓国人の「우리・남」モデル修正版

韓国の場合，남の視点がある電車では，남との比較が容易に行われるため，身体接触が「大胆」に行われる。しかし，個室という남の視点がない空間では，우리の結束が弱くなり，座る割合も小さくなって，多様な要因の影響を受けるのではないだろうか。また韓国では道端でいちゃつくカップルを目にすることが多い。先行研究で提示されてきた韓国人の対人行動モデルを用いた場合は，カップルという우리に属さない남には気を遣う必要がないために，남の視点を気にせずにいちゃつくというように説明できる。しかし本稿で修正したモデルに従えば，남という視点があるからこそ，우리の強い結束力を示すために，人前でいちゃつくと言える。

以上のように，本節では「場面の公私性」という仮説から，日韓の対人行動意識について少考し，対人行動モデルの修正を試みた。

8．おわりに

本稿では日韓のコミュニケーション行動研究の一環として，身体接触の日韓対照研究を行った。先行研究とは異なり，要因間の大小関係や場面要因に注目するため，要因間の階層性を視覚的に検討できる決定木分析を用いて，身体接触の総合的研究を行った。

分析の結果，行動主体，行動客体の属性だけでなく，「空間の公私性」という場面要因が身体接触に影響を及ぼし得るという仮説を提唱した。日本の場合，空間の私的性が高くなると，行動主体や行動客体の属性の影響を比較的受けずに，座るという行為が選択されやすくなる一方で，韓国の場合は対照的に，公共性の高い空間で，そうした傾向を見せる。このように「空間の公私性」は日韓それぞれの身体接触に与える影響が異なると考えられる。

さらに「空間の公私性」という仮説のもとで，日韓の対人行動意識を少考した。日本ではヨソという視点がウチ・ソトへの対人行動を規定し，ヨソの視点がある方が，対人行動が制約を受ける。一方，韓国では남の視点が，その状況に応じて最も相応しい우리を選択し，日本同様に우리への対人行動を規定する。しかし韓国では，남の視点がある方が우리の強い結束力を示すために，より「大胆」な対人行動が行われる。

このように，本稿では決定木分析を用いることで，複数の調査設定場面を比較することができ，「空間の公私性」という要因に焦点を当てることができた点で大きな意義があると考えられる。また同時にコミュニケーション行動研究に決定木分析を用いることの有効性を示すことができたと言える。

しかし本稿には多くの課題が残されたことも事実である。本稿では「空間の公私性」という仮説を立てて，日韓の身体接触，対人行動を考えてきたが，「空間の公私性」はあくまでも可能性の一つに過ぎず，実証できたとは言い難い。「空間の公私性」という仮説を提唱後は，演繹的な推論に留まり，他の可能性を考慮していない。本稿は座席選択調査を身体接触意識が現れるものとして，身体接触調査と比較したが，両調査の設定場面には身体接触以外にも，様々な異なる要因が存在するものと思われる。尾崎編(2008)の二次分析だけではなく，「空間の公私性」に着目した，新たな調査の設計，分析が望まれる。また「空間の公私性」という仮説からヨソ／남の視点が対人行動意識に与える影響を考えたが，本稿ではヨソ／남を代表する見知らぬ人に対する身体接触は分析の対象外となっており，ヨソ／남という要因と対人行動意識の関係を明らかにできていない部分が多い。さらに「場面の公私性」が与える影響にも，性差や世代差が存在する可能性もある。今後はこれらの点にも注目した調査を行う必要がある。[22]

また決定木分析は非常に有効な分析方法であるが，出力される樹木構造には有意な要因や要因間の大小関係など様々な情報が含まれる。決定木分析は比較的新しい統計手法であるために，出力された結果に対する考察の方法はまだ定まっていない状態である。機械が発達し，大量データの複雑な分析方法が可能になり，いくら優れた統計手法が生まれても，その結果を考察するのは人に他ならない。十分な考察を与えられなければ，宝の持ち腐れとなってしまう。決定木分析の結果に対して，十分な考察を行う能力を養成しなければならない。[23]

上記の課題を克服することが，身体接触を始めとした，日韓のコミュニケーション行動研究の進展につながっていく。

《註》

1) 決定木分析については4節で詳しく述べる。
2) 洪珉杓(2007)で「駅で高校の同級生に偶然会った時，どのように行動をするか」という調査を行った結果，韓国人男性は「握手をする」，韓国人女性は「両手をとる」という回答が最も多かったのに対して，日本人は男女共に「ことばでのみあいさつをする」という回答が最も多かった。また両国の女子学生を対象に，親しい友人と食堂や図書館に行く時の歩く動作に関する調査を行った結果，韓国人女性は「腕を組んで歩く」，日本人女性は「別々に歩く」という回答が最も多く現れた。
3) アンケート調査の概要（調査対象の地域別・年齢層別回答者数や調査方法など）は次節や尾崎編(2008)，面接調査のそれは尾崎編(2008)を参照されたい。
4) 任栄哲(2008)では行動主体・行動客体の属性に注目した結果，以下のことを明らかにした。ただし④については，本稿では否定的な立場を採っている。6節の分析を参照のこと。なおウチ・ソト・ヨソについても本稿6節で詳しく述べる。
   ①韓国（ソウル）は中年層・若年層よりも高年層の方が座る割合が高い「高年齢層中心型」である一方で，日本（東京）は高年層・中年層よりも若年層の方が座る割合が高い「若年層中心型」である。
   ②日韓共に，男性よりも女性の方が座る割合が高い。
   ③行動客体がウチの関係である場合は日韓共に座る割合が高い。これに対しソトの関係とヨソの関係は日韓で序列が逆になり，日本人はヨソよりもソトに対して気を遣う（距離を置く）傾向が見られる一方で，韓国人はむしろソトに対して気を遣う（距離を置く）傾向が見られる。
   ④行動主体は，日韓共に行動客体との年齢の上下関係よりも，以前から知っているか最近知り合いになったかという擬似親疎関係や行動客体の性別を基準とする傾向が見られる。
5) 尾崎編(2008)の調査で得られたデータは同書に CD-ROM で添付されており，二次分析が可能である。
6) 設定した年齢層は調査当時を基準にしている。
7) 本稿では身体接触の総合的研究を目的としているため，以下で二次分析する尾崎編(2008)の身体接触調査も座席選択調査も「身体接触調査」と言うこともできる。ただ本稿では尾崎編(2008)の一次分析結果との比較を容易に行えるようにするため，尾崎編(2008)で用いられた調査項目名称をそのまま利用する。
8) 詳細は尾崎編(2008)所収の任栄哲(2008)を参照のこと。
9) ただし当該設問では隣の人を一方向のみでしか考えておらず，存在し得るもう一方の隣の人については考慮していない。
10) 詳細は尾崎編(2008)所収の車・尾崎(2008)を参照のこと。
11) 前述の身体接触調査と合わせるため，質問の順序を一部入れ替えた。
12) 他の分野に関する決定木分析の応用例については豊田編(2008)に詳しい。豊田編(2008)では「タイタニックの運命」，「偽札データ」，「不動産の鑑定」，「大学教員の年収」という様々なデータを対象に決定木分析を実践している。またオープンソースの統計ソフトウェアである R

を用いた決定木分析の方法を紹介しており，本稿でも豊田編(2008)を大きく参考した。

13) 決定木分析の結果は統計ソフト R 2.12.0 のパッケージ mvpart によって得られた結果をもとに筆者が Microsoft Office Excel 2007 で作成した。また各ノードにおける χ^2 値は PASW Statistics 18 によって得られたものである。

14) 2節の先行研究を参照。

15) 紙幅の都合上，身体接触調査を「身体」，座席選択調査を「座席」で表す。また行動主体の属性については，行動客体のそれと区別しやすいように網掛けで示した。主体年齢だけは，他の要因間の大小関係とは異なり，調査によって大小関係が異なるため，下線を付した。

16) 韓国の座席選択調査結果は異なる傾向を見せるが，この点については後述する。

17) 註4の④を参照のこと。

18) 同様のことは行動主体の性別についても言える。任栄哲(2008)では「日韓共に男性より女性の方が座る割合が高い」と述べているが（註 4②），韓国の身体接触調査では行動主体性別は有意な要因として認められなかった。一方で，座席に座る人は「韓国は「高年齢層中心型」である一方で，日本は「若年層中心型」である」と述べられているが（註 4①），その傾向は図1，2からも読み取れる。

19) ただし三宅(1994)では「会社の上司のように，直接話す時は高い丁寧度の言語表現を使う相手でも，外部の人間では，ウチの人間として謙譲語を使う対象となる」という相対敬語の例を取り上げ，この境界は状況によって収縮すると述べられている。

20) この三宅(1994)で挙げられる具体例は，任栄哲(2008)で得られた分析結果の一つである，「日本人はヨソよりもソトに対して気を遣う（距離を置く）」（註 4③）とも一致している。ただ任栄哲(2008)の分析結果のうち，この註 4③については，本稿でソトの人間関係を分析の対象としていないため，再検討できていない。8節でも述べるように，今後の課題としたい。

21) ただし任・井出(2004)では，本稿のように何らかのデータを分析した上で，ヨソの視点としての役割を述べているわけではない。

22) 三宅(1994)ではヨソに関する研究の方向性が述べられており，今後の調査設計に大きく参考になる。

23) もちろんこれは一般論であり，本稿におけるデータの考察の不十分さは全て筆者に帰するものである。

《参考文献》

林炫情・玉岡賀津雄・宮崎弥生・金秀眞(2011)「丁寧度判定で測定したポライトネス・ストラテジーの要因に関する決定木分析」『日本文化學報』47

任栄哲(2008)「身体接触から見た個人テリトリー意識の日韓比較」尾崎喜光編所収

任栄光哲・井出里咲子(2004)『箸とチョッカラク　ことばと文化の日韓比較』大修館書店

尾崎喜光編(2008)『対人行動の日韓対照研究　言語行動の基底にあるもの』ひつじ書房

近藤安月子・小森和子編(2012)『研究社　日本語教育事典』研究社

玉岡賀津雄(2006)「「決定木」分析によるコーパス研究の可能性：副詞と共起する「から」「ので」「のに」の文中・文末表現を例に」『自然言語処理』13(2)

車峴京・尾崎喜光(2008)「座席選択から見た個人テリトリー意識の日韓比較」尾崎喜光編所収

豊田秀樹編(2008)『データマイニング入門—R で学ぶ最新データ解析—』東京図書

洪珉杓(2007)『日韓の言語文化の理解』風間書房

三宅和子(1994)「日本人の言語行動パターン—ウチ・ソト・ヨソ意識—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』8（三宅 2011 に再録）

三宅和子(2011)『日本語の対人関係把握と配慮言語行動』ひつじ書房

결정나무분석을 이용한 신체접촉의 한일 대조 연구
—'공간의 공사성'이라고 하는 가설—

新井保裕
東京大学

본고에서는 한일 커뮤니케이션 행동 연구의 하나로 신체접촉의 한일 대조 연구를 하였다. 선행연구와 달리 요인 사이의 대소관계나 장면 요인에 주목하기 위하여 요인 사이의 계층성을 시각적으로 검토하는 결정나무분석[決定木分析, Decision Tree Analysis]을 이용하여 신체접촉의 종합적 연구를 하였다.

분석 결과, 행동주체, 행동객체의 속성뿐 아니라 '공간의 공사성[公私性]'이라고 하는 장면 요인이 신체접촉에 영향을 끼칠 수 있다고 하는 가설을 주장하기에 다다랐다. 일본의 경우 공간의 사적성이 높으면 행동주체나 행동객체의 속성 영향을 비교적으로 받지 않아, 앉는 행위를 많이 선택한다. 한국의 경우는 대조적으로 공공성이 높은 공간에서 그러한 경향을 보인다. 이와 같이 '공간의 공사성'은 한일 각각의 신체접촉에 끼치는 영향이 다르다고 생각하였다.

또 '공간의 공사성'이라고 하는 가설 아래에서 한일 대인 행동 의식을 소고하였다. 일본에서는 ヨソ/요소/라고 하는 시점이 ウチ/우치/・ソト/소토/로의 대인 행동을 규정하여 ヨソ의 시점이 있으면 대인 행동이 더 많은 제약을 받는다. 한편으로 한국에서는 남의 시점이 그 상황에 따라 가장 어울리는 우리를 선택하며 일본과 마찬가지로 우리로의 대인 행동을 규정한다. 하지만 한국에서는 남의 시점이 있으면 우리의 강한 결속력을 보이기 위하여 보다 '대담'한 대인 행동을 한다.

이와 같이 본고에서는 결정나무분석을 이용함으로써 복수의 조사 설정 장면을 비교할 수가 있게 되어 '공간의 공사성'이라고 하는 요인에 초점을 맞출 수가 있다는 점에서 큰 의의가 있다고 생각한다. 동시에 커뮤니케이션 행동 연구를 한는 데에 결정나무분석이 유효하다는 것을 보일 수가 있다.